



7 月 号  
平成 30 年 7 月 25 日

# 桜花爛漫

郷土を舞台に 夢に向かい ともに歩む学校

心豊かで  
たくましい荘川っ子

- ・ 考る子
- ・ 思いやりのある子
- ・ 元気な子

## 第 22 回 海の子山の子交流

校長 水口 悟

土潤いて溼し暑し(つちうるおいて むしあつし 大暑 次候)

むわっと熱気がまとわりつく蒸し暑いころ。打ち水や夕涼みなど、暑さをしのぐひとときを。(新暦では、およそ七月二十八日～八月一日ごろ 日本の七十二候を楽しむより)

### ◇ ひとり歩きできる子の‘新島研修’



お二人の句碑は、毎年宿泊させていただいている大野屋旅館から、徒歩で約 10 分の所にありました。お二人の辞世の句を新島村で改めて読めば、約 240 年前の出来事がとても身近に感じます。最終日、子どもたちは長栄寺本堂に入り、住職さんのお経とともに、順番に焼香を行いました。その後、新島小学校 6 年生の子どもたちと一緒に墓に向かい、一人ずつ線香をあげ、持ってきた荘川のお水をかけ、お参りをしました。顔中汗だらけになりながらも、荘川の水をかける手は確かであり、数珠を手にかけて

目を閉じる顔は真剣です。新島研修に出かける前、式部庵裏のわき水を汲みに行ったときの「私たちは、なかなか行けませんので宜しくお願いしますね。」と話された女将さんの言葉を思い出します。児童の代表が「私はこの歴史のことや感謝の気持ちを忘れないようにします。そして、自分のふるさと荘川をもっと好きになって大切にしていきたいです。」と、挨拶をまとめました。



高速ジェット船が新島村の棧橋に着くと、教育長さん方が‘歓ようこそ新島村へ迎’という横断幕を、校長先生方が‘祝船入’という入り船の旗を広げてくださっています。そして、新島小学校によるトランペット鼓笛隊の演奏が始まります。これから乗船するお客さんたちも取り囲んで、興味津々・拍手喝采です。この風景を見ると、今年も、海の子山の子交流が始まる！と、わくわくするのです。

2 日目も快晴。新島の海の青さは、すばらしい！青い海は果てしなくて広い！目の前には、式根島。遠く北に見えるのは、大島。村役場の方々が、休日を返上して海岸の砂浜にいくつものテントを張り、昼食会場を準備してくださいます。恒例の‘くさや’、「今年は金目鯛のくさやも焼いたよ」と役場職員。「こっちの魚は何ですか？」と聞くと、すかさず、新島小の子どもが「あおむろ！」。正確には、アオムロアジ。省略して言う当たり、流石海の子。今年、何と高山市清見町池本から新島に嫁がれた奥さんが、前夜の広報無線を聞いて荘川小の子どもたちが来島しているのを知り、50 個のパンを差し入れしてくださいました。教育長さんの案内のもと、澤中 P T A 会長さんとお礼に出かけました。「飛騨は私のふるさと。私は新島に流されて、50 年！」とニコニコとして話してくださいました。



上木甚兵衛さんと三島勘左衛門さん、約 240 年前のお二人の出来事を通して広がる数々の出会い。新島の自然、文化、人々……。お二人も、新島の潮風を受け新島の青い海を眺め、新島の人々と語ったにちがいありません。‘飛騨ンじい’と愛称で呼ばれているのは甚兵衛さんだけだそうです。山の子どもたちは、知らぬ間に一人でも海中に飛び込めるようになり、沢山の人たちに支えられながら、今年も研修を無事えることができました。荘川町や新島村の方々には、どれだけお礼を言っても尽くすことができません。

